

札幌動飼第 87 号
平成 27 年(2015 年)8 月 10 日

札幌市保健所長 様

札幌市円山動物園
園長 田中 俊成

円山動物園におけるマレーグマ「ウッチー」死亡に係る事故報告書

当園において実施していたマレーグマの同居訓練において、平成 27 年 7 月 25 日にマレーグマ「ウッチー」を死亡させる事故が発生しましたので、下記のとおりご報告申し上げます。

記

1 マレーグマ「ウッチー」の死亡日時について

平成 27 年 7 月 25 日(土)朝 9:00 過ぎ、担当飼育員がマレーグマ「ウッチー」を屋内展示場に出そうとしたところ、バックヤードの寝室にて死亡しているのを確認しました。

2 死亡個体等

ウメキチ(オス) : 2009 年 10 月 11 日生まれ、5 歳

ウッチー(メス) : 1985 年以前生まれ、推定 30 歳以上(今回の死亡個体)

ハッピー(メス) : 2006 年 10 月 3 日生まれ、8 歳

3 担当職員等

当園は 44 名の職員配置を行っております。動物飼育は飼育展示課における業務となっております。飼育展示課は、飼育展示一係・二係で構成し、一係は「アジア・アフリカ班」及び「ふれあい班」で構成しており、マレーグマは「アジア・アフリカ班」の所管動物であり 1 名の飼育員が担当し、当該飼育員が公休の場合等においては、同班の他の飼育員がその日の飼育作業を行っております。

また、診療業務については飼育展示課に所属する獣医師 3 名が所属係に関係なく横断的に当たっています。

4 施設概要

マレーグマの同居訓練場所及び事故発生があったのは、アジアゾーン熱帯雨林館のマレーグマ舎屋外放飼場です。

5 経緯

(1) 同居の方法について

平成 27 年 4 月 2 日の課内全体会議において、今年度、ウメキチの性成熟に伴い、マレーグマの繁殖(同居訓練を含む)を開始することを決定し、課として合意形成していたところでしたが、精神安定剤等を使用するか否か、同居の開始時期・方法、同居に際しての監視体制等についての詳細な合意形成はしていませんでした。

なお、6 月に同居を開始するにあたり、年齢的にはウメキチの繁殖相手はハッピーとしていましたが、最終的には 3 頭を同居させ、お互いになれることにより、ウメキチがメスたちに対して落ち着いた行動がとれることを期待して、3 頭同居を飼育展示課として決定いたしました。

この理由として、①雄はまだ若く、過去に雄と同居生活をしていた経験のあるウッチーをも同居させることで、時間経過によりウメキチがハッピーへ接することに慣れることを期待したこと、②ウメキチとハッピーに小ぜり合いが続くこととなった場合には、もう 1 頭がいることで闘争への抑止を期待したこと、③同居訓練の前段階として、同居を続けてきたウッチーとハッピーを分けると、ハッピーが落ち着かなくなったことによります。

(2) 争いが起きた場合の対応について

まず、同居の前に、闘争対策として事前に仕切り扉を 10cm 程度開けた状態でのお見合いを複数回実施していました。

3 頭の同居時の闘争対策としては、屋外展示場～寝室、屋外展示場～屋内展示場の扉を開放し、いつでも逃げ込めるようにし、逃げ込んできた場合はすぐ仕切り扉を閉められるように準備していました。

また、背中などに深刻な咬傷を受けるような相当程度激しい闘争となることが予測される場合に、両者を分離するための放水と気を散らすための餌撒きが屋上から行えるように屋上への飼育通路確保を行っておりました。

同居に当たっては、職員は必ず付いて観察をしながら進めていました。なお、担当職員のみの日もあり複数人でない場合もありましたが、無線にて近くにいる職員をすぐに呼び出せるような体制をとっておりました。

(3) 同居後の様子について

同居後の様子についてですが、同居開始日(6月16日)は、ウメキチがハッピーに攻撃を受けており、また2頭の雌から逃げ回るなど、3頭内の順位はウメキチが最下位であったと考えられました。

その後、ウメキチとハッピーの2頭同居を試みましたが(6月19日、約1時間の同居)、同居後半にハッピーはウメキチを追い込む形になっておりました。

これはウメキチが性成熟後、他個体との同居が初めてであり、他個体に対しどのように接すればよいかわからないからであること、またハッピーは、やはりウッチーとの分離に不安があるのではないかと推定しました。

しかし、このままでは、今後、交尾等に達することが難しいであろうと考え、同居訓練開始当初から、多少の争いは想定したものの、同居の経過を経て‘仲が良い状態’にまでもって行き、ウメキチもハッピーも落ち着くことを期待しました。

この後は、2頭同居(ウメキチとハッピー、又はウメキチとウッチー)及び3頭同居を試みながら、ウメキチや雌達の行動を観察することとしました。

ウメキチとウッチーの同居訓練(6月20日及び26日)においては、それぞれ数分間の闘争があり、3頭同居訓練(7月6日)においては、ウッチーとウメキチが闘争したのち、ウメキチがハッピーに追い込まれた形となってしまいました。

これらについて課及び係としては、担当飼育員等から飼育日誌や口頭にて報告を受けていたところであり、担当飼育員、獣医師等が闘争の程度を見極めたうえで、いくら時間をかけても‘仲が良い状態’にまで持っていけそうになれば、今後は中止も視野に入れる予定をしていたところでしたが、担当飼育員に対し「同居中止」の場合の目安について具体的な指示は出してはいませんでした。

なお、担当飼育員は7月24日の闘争の状況を見て、この日限りでウッチーを同居訓練に加えることについては終了する必要があると認識していました。

【別表：同居の経過】

6/16	3 頭同居を実施(40 分間)。前半 30 分はじゃれていたが、その後、ウメキチがハッピーから咬まれ逃げたため、同居中止。なお、扉を開放し屋内・屋外共に出入り自由になっていた。
6/19, 20, 21, 22, 23, 26, 27, 28, 7/3, 4, 5	ウメキチとメスいずれかとの「2 頭同居」を実施(約 1 時間)。うち、ウメキチとウッチーの同居は 6 月 20 日、26 日。6 月 20 日は同居時間中に数分間闘争があり、26 日は同居時間中の前半に数分間闘争があったが、後半はなかった。両日を除く日は、ウメキチとハッピーとの同居を実施。
7/6	3 頭同居を実施(約 1 時間)。ウメキチとウッチーが闘争、その後ウメキチとハッピーとが闘争しそうになりウメキチが逃げた。なお、扉を開放し屋内・屋外共に出入り自由になっていた。
7/11, 12, 13, 14, 17, 18, 20, 21	ウメキチとハッピーを同居
7/24	3 頭同居を実施(約 1 時間)。ウメキチはウッチーと闘争(約 20 分間)。なお、扉を開放し屋内・屋外共に出入り自由になっていた。
7/25	朝、ウッチーの死亡確認

なお、ウッチーの他個体との同居時刻及び同居に当たって監視していた職員は以下のとおりでした。

6/16： 13 時半頃～14 時 10 分頃： 担当飼育員＋獣医師 1 名

6/20、26： 14 時半頃～15 時半頃： 担当飼育員＋飼育展示一係長

7/6： 13 時半頃～14 時 10 分頃： 担当飼育員 1 名のみ

7/24： 14 時半頃～15 時半頃： 担当飼育員 1 名のみ

(他の日は、担当飼育員＋他の飼育職員が見ていたこともあるが、記録なし。この中で、飼育展示課長は部分的に 6/26 に確認。)

(4) 7 月 24 日の同居の様子を観察して「ウメキチ」と「ウッチー」を分けるに至らなかった理由について

7 月 24 日は、近くに職員を配置していたものの、同居中の観察は担当飼育員 1 名のみで行っていました。

同居直後から、ウメキチはウッチーに対して積極的に背面に回ろうとして、それを嫌がったウッチーを押さえつけようとしていると推測したところでした。

闘争のあった約 20 分間、結果的にウッチーはウメキチに向かい合う態勢となったりし、ウメキチがウッチーに噛みつき、力づくで抑え込むような行動となりました。しか

し、首・背中への大きな咬傷となるような闘争とは捉えられず、また正面からの攻撃等もなく、致命的なことになるとは考えていませんでした。

(5) 「ウッチー」の負傷に対して獣医師がとった措置について

獣医師は、ウメキチとの同居時の後肢裂傷(7月6日)の経過を見て、化膿が確認されたことから、抗生剤の処方を行いました(7月17日から3日間分)。

7月24日については、ウッチーが寝室に入った直後(15時半過ぎ頃)、獣医師が見に行った際は、最初はせわしなく動いていましたが、呼吸は荒い状態でした。次に獣医師が、止血剤及び抗生剤の投薬のため16時頃向かった際は、多少呼吸は落ち着いてきた様子がありました。また、17時頃にもう一度確認に行った際は、落ち着いて休んでいました。なお、担当飼育員は19時頃まで断続的に観察し、リンゴを食べたのを確認していました。

なお、7月24日は、骨折やヘルニアについての発生を疑うような外観所見が見られなかったことから、当日は麻酔処置をかけてのレントゲンによる確認等は行わず、翌日の経過を見ようと考えていました。

(6) 「ウッチー」の同居訓練の継続について

結果的に肋骨骨折があったところですが、担当飼育員も、また獣医師も同居訓練期間中は確認することができませんでした。7月24日以前において治療が必要なのは、右後肢の跛行と考えていました。

また獣医師は、跛行についてはウッチーの動きを観察し、また飼育員にも聞き取り、改善傾向にあると考えていました。

なお、右肢の跛行はありましたが改善傾向であり、また細かい擦過傷等はありませんでしたが、展示に不適なほどの状況であるとの認識はありませんでした。

同居訓練開始後に、「同居訓練を始めた」、「お互いまだ慣れていないのでケンカになることもあるかもしれない」、「担当飼育員が様子を見ているので安心してほしい」旨を記載した看板を掲示していましたが、園内放送、口頭による観覧者へのお知らせ等は行っていませんでした。

6 死因について

死因：腸管の横隔膜ヘルニア

【剖検診断】

1. 右第12～第15肋骨の骨折
2. 肋骨の骨折端による重度の右脇腹損傷と右横隔膜の穿孔
3. 腸管の横隔膜ヘルニア

7 事故の原因について

当園において詳細に検証を行い、今回の事故につきましては以下の原因によるものとの結論に至りました。

7月24日(金)の同居訓練において20分間の闘争があったが大丈夫な状態であると見誤ったことによるものであり、獣医師の立ち会いがあれば防ぐことができた可能性がありました。これらは飼育展示課における繁殖推進体制の不備によるものです。

《具体的な事項》

- ・同居訓練開始にあたり、同居時の安全確保のため、事前の見合い、治療、同居時間、同居中断のための準備、同居時の観察人員体制及びスケジュールなどについて、飼育展示課としての検討が十分といえないまま実施に至った。
- ・また、同居時の監視体制等について、特に獣医師を含む複数の職員による観察と、同居訓練に伴う適切な判断を的確に行える体制をとっていなかった。
- ・実施の継続にあたり、訓練回ごとに、動物の行動変化、健康状態、怪我の有無等や処置などを記録し、その結果を踏まえ、組織としての可否判断を行える体制をとっていなかった。

8 速やかに改善を図ることとした事項について

今後の繁殖の推進にあたっては、動物の状態を見極め、上記7の体制不備を踏まえ、動物の同居訓練において、適切な対応を行うために、次の改善を図ることといたしました。

(1) 動物の同居訓練開始にあたって

安全確保のため、事前の見合い、精神安定剤等の使用の有無、治療、同居時間、同居中断のための準備、同居時の獣医師を含む観察人員体制及びスケジュールなどについて、飼育展示課としての合意形成を図ること。

(2) 同居訓練時の監視体制について

同居訓練においては、獣医師を含む複数職員での観察を行うこととし、訓練実施や中止などの適切な判断ができる体制を整えること。

(3) 実施の継続にあたって

動物の行動変化、健康状態、怪我の有無等や処置などの結果を踏まえ、飼育展示課としてより慎重な可否判断を行うこと。